

随 想

1970年を送るに当たり

住 友 元 夫*



今年も12月になり1970年もいよいよ終わりを告げようとしている。想えば1970年代の第1年目として歴史に残るような大きな出来事であつた年である。

国家的の出来事としては何といても万国博覧会を挙げねばなるまい。その参加国数は79カ国と言われ、連日の超満員で実に入場者総数は6400万名を越えるという記録を作り成功裡に終わつた。ところで第1回の万国博覧会は人類の統一をめざして1851年ロンドンで開催されたが、これは鉄鋼業にとつても重要な出来事であつたのである。記録によると、人々はここで始めて大型の鋼塊と世界における鋼の大量生産の重要性をその眼で確かめたとある。ところでその大型鋼塊とはクルップが出品したもので2150kgあり、これは当時としてははずばぬけたものであつたという。今日では20t、30tなどは普通の鋼塊であることを思えばまことに今昔の感に耐えない。

また鉄鋼業界での大きな出来事としては9月に東京で開催された鉄鋼科学技術国際会議がある。これはまことにわが国鉄鋼界としては記念すべきことであり、永遠に全世界の鉄鋼業にたずさわる技術者、研究者の記憶に残るものである。参加国数は36カ国、参加人員1114名、内外国人340名という盛況であり、活発な研究発表と討論が行なわれた。参加各国からはこの国際会議は1回だけで終わることは残念であり、この方針を引継いで1974年には欧州で、その3年後には米国で開催されることになつたと聞いている。

このように国際会議を主催することができるようになったのも一にかかつてわが国の鉄鋼界の実力が国際的水準に達したことによるもので、鉄鋼の生産量も1億トンに迫り、世界第3位になつたことは今さらここで改めて言うまでもない。10年前にはまだ2200万トン程度の生産量であつたことを思えばまことに感慨に耐えない。また、私自身も1959年に欧州へ出張する機会を得たが、その頃は欧米の技術に学ぶことが多く、わが国からの見学者が多かつたものである。ところが最近では海外からのわが国各社への訪問客が多く、積極的にわれわれの工場見学、討論を求められる状況である。私達の技術水準が戦後の1/4世紀の間にここまで達したのはわが国の産業、経済の神秘的とまでいわれた発展が背景にあつたとはいえ、われわれ鉄鋼関係の技術者、研究者の真剣な努力が実つたものと言わねばならない。

今やわが国は経済力からいつでも一流国となつたのであり、鉄鋼業もまたしかりである。しかし、ここにおいて私達の大いに反省しなければならぬ点がありはしないかと思うのである。

その第一は、私達がこの日本という一流国家の技術者、研究者であるという認識、言うなれば大国的な襟度をもつて事を処しているかどうか、ということである。しからば、大国的襟度とは何か。これにはいろいろな物の見方、考え方はあると思うが、たとえば次のようなことではないかと考えるのである。

* 本会副会長 住友金属工業(株)専務取締役中央技術研究所長

まず“fair にもものを見る”ことであろう。公正にもものを見ることは口で言うほど簡単でない。つい何かの先入観に囚われるものである。たとえばほとんど同じ内容の論文が外国と日本で出された場合、日本の論文は、いや日本語で書かれた論文はと言ったほうがよいかもしれないが、外国の論文より価値が低いと見るようなことはなからうか。少し前までは、外国語の論文あるいは外国の技術は信用するが、日本のものは信用しないということをよく聞いたものだ。これなどは fair にもものを見ていない典型的なものである。これに類するようなことをしてはものごとの評価を公正にできるはずがない。

次は“frank にとり入れる”ということである。誰の提案であつても妥当であり、価値があると判断した場合は率直に耳を傾けそれにとり入れたいものである。それはよいことだと思つても自分のこれまでの主張と相反するような場合、あるいは自分の立場を守らんがためになかなか率直にこれを受入れないなどはまことに度量が狭いと言わねばなるまい。しかし、提案を frank にとり入れると同時に提案者の authority を尊重することをも忘れてはなるまい。

反省すべき第二は自主技術に対する心構えである。つねづね日本には自主技術が少ないではないか、LD 転炉、連続鑄造、真空処理技術などはすべて外国で端を発した技術である、などと始終言われているところである。しかし私達の技術の現在の水準からすれば十分に自主技術、自主製品を産み出しうる能力があるはずである。世界に誇る東海道新幹線の完成にはやはり日本の鉄道技術の水準が高かつたこと、これに関係した機械、電気、土木など各方面の技術者の強力な研究開発心、一致協力があつたことによるものである。私達もこれを範として今いつそう積極的に各専門分野の協力を得てわが国独自の新技術新製品の開発に努力しなければならない。

反省すべき第三は今後の技術者のあり方ともいうべきことである。それは私達の周囲には専門家と称する人が沢山いるが、いずれも狭い範囲のことについて詳しい。しかしながら広い範囲のことに通暁した技術者は少ない。新分野の開拓、新技術、新製品の開発にはこのような広い視野を持つ技術者こそ必要で、是非とも育てて欲しいものである。

いまや、1970 年は暮れようとしている。あと 9 年すると 1970 年代が終わることになる。その時点で私達が 1970 年代をふりかえつてみたとき、日本の鉄鋼界にとつてこの 1970 年代を悔いのないものにしなければならない。いよいよ私達鉄鋼技術者 研究者の努力が望まれるゆえんである。